

総 説

# 古代エジプトの「装い」

内 田 杉 彦

明倫短期大学 歯科技工士学科

## The Makeup and Clothing in Ancient Egypt

Sugihiko Uchida

Department of Dental Technology Meirin College

キーワード：古代エジプト, 化粧, 整髪, 衣服, 装身具

Keywords: Ancient Egypt, Makeup, Hairdressing, Clothing, Jewelry

### 1. はじめに

今から数千年前に生きていた人々がどんな姿をしていたか思い浮かべるのは、普通は容易でない。しかし古代エジプト人については、王や貴族から農民にいたるまで、我々は彼らの姿をそれなりに思い描くことができる。これはひとつには、他ならぬ古代エジプト人自身が、自分たちの姿を絵画や浮彫、彫像に数多く残している結果と言えるだろう。

しかし、このような古代エジプト人の「自画像」は、当時の人々の外見、化粧や衣服などの「装い」の一面しか表していない点に注意しなくてはならない。絵画や彫刻の示す人物像は、その人物の「代わり」、あるいはその靈魂が宿る「肉体」の役割を果たすことを期待されていた<sup>1)</sup>。たとえば墓の壁画に描かれた貴族の姿は亡き貴族の靈魂が宿る「肉体」であり、さまざまな労働に従事する庶民の姿は、来世で貴族の死後の生活に奉仕すると信じられていたのである。したがってこれらの人物表現は、貴族の地位や立場、庶民に割り当てられた役割にふさわしい典型的な姿を表したものであり、型にはまったものとなりがちであった。貴族は、髪やさまざまな装身具を身につけ、優雅な衣服をまとう姿で描かれるが、こ

表1. 古代エジプト年表 (内田杉彦『古代エジプト入門』岩波書店, 2007の年表より)

先王朝時代 (紀元前5500～3000年)

王朝時代 (紀元前3000～332年)

初期王朝時代 (第1～2王朝: 前3000～2682年)

古王国時代 (第3～6王朝: 前2682～2191年)

第一中間期 (第7～11王朝: 前2191～2025年)

中王国時代 (第11～12王朝: 前2025～1794年)

第二中間期 (第13～17王朝: 前1794～1550年)

新王国時代 (第18～20王朝: 前1550～1069年)

第三中間期 (第21～25王朝: 前1069～712年)

末期王朝時代 (第25～31王朝: 前712～332年)

ギリシア系王朝時代 (前332～30年)

プトレマイオス朝時代 (前304～30年)

ローマ支配時代 (前30年～後395年)

れは「貴族であること」が一目で分かる姿、おそらく儀礼や祝宴などの際の「晴れの姿」であり、必ずしも彼ら貴族の日常の姿を表しているとは言えないのである。

一方、貴族の墓からは、墓の主が実際に身につけていた衣類 (あるいはその断片) がわずかながら発見されており、鏡や化粧用品、装身具など、衣類に

くわえて当時の人々の外見を形作っていた遺物も数多く残されている。これは「装い」が古代エジプトの人々にとって、来世でも大きな関心事だったことを示している。近年では、壁画や浮彫、彫刻に示される図像だけでなく、このような遺物をも分析・研究することで、当時の「装い」に関する幅広い情報が得られるようになっていく。

## 2. 化粧

自分を美しく、体裁よく見せるための化粧の習慣は、現代人にも共通したものであるが、古代エジプト人と化粧との関わりには彼らなりの事情があった。エジプトが高温乾燥の地で埃が多く、身体が汚れやすかったこと、その一方で、大河ナイルと縦横に走る水路、点在する溜め池や湿地のおかげで水には不自由しなかったことから、当時の人々は日常的に水浴をする習慣を持っていた。神々に奉仕する神官は、身体を清浄に保つため、神殿に設けられた「聖池」で日に三度の水浴を行っていたし、少なくとも新王国時代には、上流階級の人々の住居に、訪問客が手足を洗う水受けや、排水口のある浴室が設けられていたのである<sup>2)</sup>。このような設備は、庶民にとっては無縁のものだったが、彼らも（水中に潜む鰐におびえながら）水路や溜め池で水浴をしていたとみられる。身体を洗うには、植物油か獣脂に石灰を混ぜた「クレンジングクリーム」があったが、この種の「クリーム」は、新王国時代の王妃の墓から副葬品として発見されており、上流階級しか使うことのできない贅沢品だったのかもしれない<sup>2) 3)</sup>。

水浴を終えた後の皮膚は、エジプトの強烈な日光と乾燥した大気のもとでは荒れやすかったため、油や軟膏を塗る習慣があった<sup>2) 4)</sup>。それは必ずしも裕福な人々に限られていたわけではなく、屋外で働く人々にとっても欠かせないことであり、たとえば、第20王朝のラメセス3世の治世（前1160年頃）には、給与の遅配に抗議する王墓造営職人たちが、役人に「衣服、軟膏、魚、野菜がない」と訴えている<sup>4)</sup>。職人たちの要求事項として食料よりも先に「軟膏」が挙げられていることから、屋外で長時間を過ごす彼らの生活のなかでスキンケアがいかに大切だったかがうかがえると言えよう。

当時の油や軟膏の材料<sup>2) 3)</sup>については、直接の証拠はあまり残っておらず、多くの場合、その頃入手可能だった原料などから推定せざるをえない。化粧用の油が採られていたとみられる植物としては、ゴ

マ、ベニバナ、ワサビノキ（モリンガ）のほか、繊維がリンネルの素材に使われた亜麻があり、新王国時代中頃には、アーモンドとオリーブが輸入されていた。一方、軟膏の原料となっていたのは動物の脂肪（獣脂）であって、雄牛やヤギ、ヒツジなどの家畜のほか、水鳥のガンやカモの脂肪が使われた可能性がある<sup>2)</sup>。

このような油や軟膏は、前述のように、庶民にも利用されていたと考えられるが、良質の油、とりわけアーモンド油やオリーブ油のような輸入品を使うことができたのは、やはり王族や貴族のような裕福な人々に限られていただろう。睡蓮や杉、香草、スパイス、没薬や乳香などの樹脂で芳香をつけた香油や軟膏も作られたが、これらもまた材料の多くが輸入品だったため、庶民には手の届かない贅沢品であった<sup>2)</sup>。油や脂肪に香りを吸着させるには、花や樹脂など香りの原料を油に浸し、あるいは脂肪の上に広げて、香りがつくまでそれを繰り返すアンフルラージュ（冷浸法）、摂氏65°に熱した油や脂肪に材料を浸して濾過するマセレーション（温浸法）、そして香りの素材と油と一緒に袋に入れてじかに絞る方法があったとみられる<sup>2)</sup>。

古代エジプト人の化粧のなかでも、私たち現代人にとって印象的なものは、顔の化粧、特に、男女とも行ったアイメイク<sup>2) 4) 5)</sup>であろう。このアイメイクには、「パレット」（化粧板）と呼ばれる粘板岩の石板の上ですりつぶし粉末にした鉱物を、樹脂か油で溶いた顔料が使われた。このパレットと顔料は、エジプトで農耕・牧畜の生活が開始された先王朝時代には副葬品としてしばしば墓に納められており、化粧が人々の生活のなかで古くから大きな位置を占めていたことがうかがえる。

アイメイク用の主な顔料<sup>2) 4) 5)</sup>は、孔雀石から作られた緑色の顔料と、方鉛鉱から作られた黒色の顔料（コール）であり、絵画などに描かれる人物の顔にアイメイクを示す彩色が残っているため、それぞれの顔料がどのように使われたのかがある程度推測できる。それによると本来は、下瞼に緑の顔料、睫毛と目の縁には黒の顔料がそれぞれ塗られていたとみられるが、新王国時代になると緑の顔料はあまり使われなくなり、黒の顔料がアイメイク用として一般的となった。

古代エジプト人がアイメイクを好んだのは、ひとつには目を引き立たせて美しく見せるためだったであろう。事実、古代エジプト語で「美しい」を意味



する単語のひとつ（アン）には、意味の範疇を決める決定詞として、瞼に顔料を塗った目の文字が使われており、メイクを施した目が美しさの条件とされていたことがうかがえる<sup>2)</sup>。アイメイクはまた、単に美容のためだけでなく、目の健康のためにも必要なこととされていたであろう。エジプトの強烈な日光と埃っぽい風土は目を痛める原因となっただろうし、ハエが媒介する眼病も広まっていたとみられる<sup>6)7)</sup>。事実、新王国時代に編まれた「医術文書」エーベルス・パピルスには、さまざまな眼病について目や目の周囲に塗る薬の処方記されているが、その材料として挙げられた薬物のなかに、アイメイクに使われる黒と緑の顔料も含まれているのである<sup>2)7)</sup>。

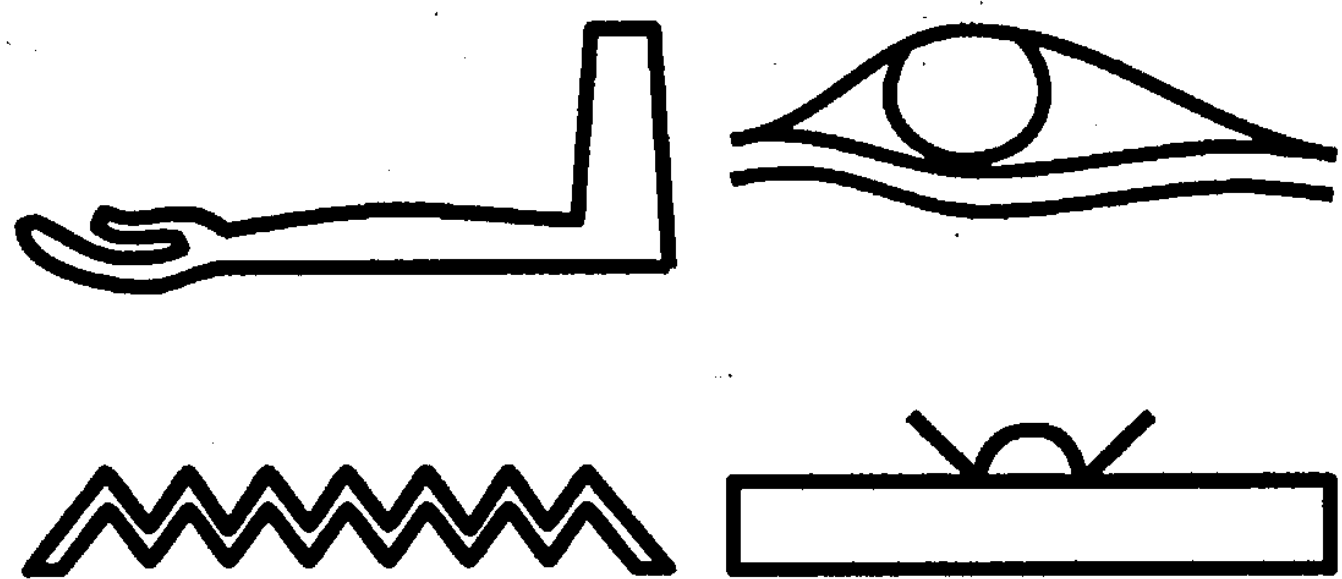


図1. ヒエログリフで記された古代エジプト語のアン（「美しい」）。決定詞のひとつとして、顔料を下瞼に塗った目を表す文字が用いられている。

鉱物をすりつぶした顔料は目に入ればかえって有害であるはずだが、その黒や緑の色はエジプトの豊かな国土や植物の生命力を象徴するものとされていたから、目に活力を取り戻す効果があると考えられていたのだろう。しかし、緑の顔料のもとである孔雀石にはバクテリアを殺す作用があることが確かめられており、目の周囲を黒く塗ることには、少なくとも日光の影響を和らげる効果があったことは確かと言える<sup>2)7)</sup>。

アイメイクを施すには、当初はもっぱら指が使われていたとみられるが、中王国時代までには、先端が丸くなった細長い棒（コールスティック）が使われるようになった<sup>4)5)</sup>。このスティックには石や象牙、黒檀、青銅などで作られたもの、金の装飾が施されたものなど、上流階級が愛用する高級品が多くみられる。コールスティックは、おそらく赤色オーカー（酸化鉄）から作られたとみられる口紅を塗るためにも使われており、新王国時代に描かれたパピルスには、左手に鏡を持ち、右手に握ったコールスティックを唇に近づける女性の姿が描かれている<sup>2)5)</sup>。

現在のエジプトの結婚式では、ミソハギ科の植物であるヘンナの葉と根から作った赤いペーストを新

郎新婦の指先に塗る習慣があるが、古代エジプトの彫像のなかには指先を赤く塗られている例がいくつかみられ、赤色の顔料、おそらくヘンナを指先に塗る風習が当時もあった可能性が指摘されている<sup>3)5)</sup>。古代エジプト人はヘンナを髪染めに用いており<sup>3)4)5)</sup>、口紅にも使ったことは考えられるが、紅をさす慣習がどの程度行われていたのかを示す証拠は、前述のパピルスの絵以外には乏しい。

アイメイクなどに用いる顔料は、中王国時代には幅広い縁と円盤形の蓋をもつ専用の壺（コール壺）<sup>5)</sup>にいれられるようになり、新王国時代には、コールスティックを差し込む穴をあけて使いやすくしたコール壺が作られた。しかしこの時期には管状のコール容器（コールチューブ）に代表される新しいタイプのコール容器が登場、これに押されたコール壺は第18王朝中期以降、徐々に廃れていく。コール容器のこのような変遷はおそらく、エジプトが新王国時代に領土を拡大、繁栄を享受した結果、とくに上流階級の間でアイメイクの慣習がますます洗練された結果と言えるだろう。

コールチューブ<sup>5)</sup>は、葦の茎をかたどった管、あるいはそれを何本か束ねた形の容器で、木材や石材、象牙、ファイアンスで作られていた。管を何本か束ねた形のコールチューブの場合、数種類の顔料や軟膏などをいれられるので便利であり、おそらくこれが、一種類の顔料しか入らないコール壺が廃れた理由のひとつであろう。事実、遺物として現存するコールチューブのなかでも数多く見られるのは、2～7本の管を束ねたタイプで、なかには管ごとに異なる中身を示す銘文が刻まれたものもみられる<sup>2)4)5)</sup>。たとえば、4つの管からなるコールチューブのなかには、1つの管に日常のアイメイク用顔料、3つの管には古代エジプトの各季節（「増水季」「播種季」「収穫季」）向きの顔料や目薬を入れたものがあったことが、こうした銘文から明らかになっているのである。管を束ねたコールチューブにはスライド式の蓋がつけられ、チューブ本体にコールスティックを差し込む穴や溝があって、スティックを差し込めば蓋が固定できるものも作られた。このほかにもコアガラスで円柱（「ヤシ柱」）をかたどった装飾的なコールチューブが数多く作られたほか、サルの小像が管を支える形の容器、女性や動物をかたどった容器などさまざまな顔料・軟膏容器が現存している<sup>5)</sup>。

化粧の際に自分の顔を見るためには、庶民はもっぱら水面を利用するしかなかっただろうが、裕福な

人々は早くから鏡<sup>2) 4) 5) 8)</sup>を利用することができた。先王朝時代の遺跡からは石を磨いて作った鏡が発見されており、初期王朝時代には銅製の鏡が作られていた可能性がある<sup>8)</sup>。姿見のような大形の鏡は作られなかったものの、金属製の丸い鏡面に柄をつけた手鏡は古王国時代以降、数多く作られた。現存する鏡面は多くが青銅か銅のものだが、金や銀、琥珀金の鏡面をもつ鏡も作られていた<sup>2) 4) 8)</sup>。鏡の柄については、中王国以前のものは木材あるいは象牙で作られたために残りにくく、現存する例は少ないが、新王国以降の鏡では金属製の柄が一般的となったため、鏡面とともに比較的良く保存されている<sup>5)</sup>。現存する柄には、化粧道具にふさわしく美の女神ハトホルの顔を意匠に取り入れたもの、「喜び」「若さ」を象徴するパピルスあるいはそれを模した円柱(「パピルス柱」)や、性的な魅力と美を象徴する裸体の少女をかたどったものなど、さまざまな装飾を施したものが見られる<sup>2)</sup>。

こうした装飾が示すように、鏡は単なる実用品ではなく、用いる人に活力や生命力、美しさを与えると信じられていた。人の顔を映す鏡を古代エジプト人はマウ・ヘル(「顔を見るもの」)と呼び、アंक(「生命」「生きているもの」)とも呼んでいたが<sup>4) 8)</sup>、これはひとつには丸い鏡面と「パピルス柱」形の柄が聖なる結び目を表すアंकの文字の形を連想させるためであり、さらには鏡が持つとされた呪術的性格のゆえであろう。鏡の丸い形や太陽光線を反射する性質から、鏡を太陽と結びつける見方もあったことは、ギリシア・ローマ時代に鏡が「日輪」(アテン)と呼ばれた例があることなどからうかがえる<sup>4) 5)</sup>。

材料に金属を使い、念入りの装飾が施され、呪力を宿した鏡は貴重品として大切にされ、使わない時はリンネル(亜麻布)に包まれて、専用の容器に収納されていた。容器としては、鏡の形に合わせて作られた鏡箱があり、たとえばトゥトアंकアムン王墓からはアंकの形に作られた鏡箱が発見されている<sup>2)</sup>。鏡を携帯するための手提げ袋も壁画や浮彫などにしばしば描かれており、その表現から、動物の皮か籠細工で作った本体に、なめし革の縁取りと紐を付けたものだったとみられる<sup>8)</sup>。

### 3. 整髪と髭剃り、鬘

古代エジプト人の化粧の根本をなすのが清潔の重視であったことはさきに触れた通りだが、毛髪を整え、髭や体毛を剃ることも、清潔に関わる彼らの生

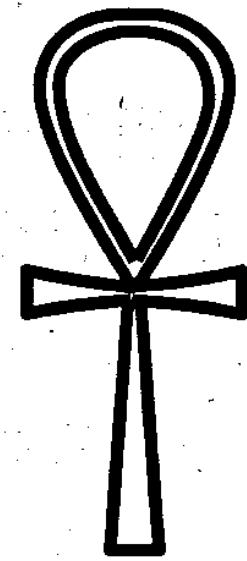


図2. ヒエログリフで記されたアंकの文字。

活習慣のひとつだった<sup>4) 5) 9)</sup>。当時の壁画や浮彫には、無精髭や毛深い姿はほとんど描かれず、そうした特徴が表現される場合は異国人か、労働者のような身分の低い人々に限られる。体毛を伸ばすことは不潔でありマナー違反であるとされ、少なくともしかなるべき立場や身分の人々にはふさわしくないとされていたのだろう。神々に奉仕する神官は、毛髪や髭、眉毛を含む体毛すべてを剃り落すことを要求されていたが、これはその極端な例と言える。

髭は権威の象徴とされる場合もあり、王や男神はしばしば長い付け髭をつけた姿で表現され、時代によっては顎髭や口髭を生やした貴族の姿が彫刻や壁画などにみられることもあるが、古代エジプトの男性はむしろ髭を剃りおとすのが一般的だった<sup>5) 9)</sup>。毛髪については、庶民の男女はエジプトの気候でも暑苦しくない程度に伸ばすのが普通だったとみられるが、ある程度高い地位にある男女は毛髪を短めにして過ごし、改まった機会には鬘をつける習慣があった<sup>4) 5) 9)</sup>。これはひとつにはシラミの害をできるだけ防ぐためだったであろう<sup>9)</sup>。事実、ミイラの毛髪からシラミの死骸や卵が発見される場合があり、当時の人々がシラミに悩まされていたことがうかがえる。子供たちはある年齢になるまで、一房の髪をのぞいて毛髪を剃る習慣があったが、これは子供の印であるとともに、シラミよけの意味もあったのだろう。

古代エジプト人は散髪や髭剃りにどんな道具を使ったのだろうか？ 貧しい庶民はおそらく、火打石のナイフのような石器を使う以外になかっただろうが、裕福な人々は銅や青銅で作られたナイフや脱毛用の毛抜き、剃刀を使うことができた。剃刀には古くから片刃と両刃の2つのタイプがあり、そのうち両刃のものから、中央に彎曲した柄がつく独特な形の剃刀が作られた<sup>5)</sup>。この剃刀の使用法は明らかではないが、おそらく刃の中央や柄を持って、手首を前後に動かし、あるいは回転させるようにして使ったのだろう。古代エジプトの剃刀とされるものとし



てはさらに、小刀に似ていて刃の先端がフックになった刃物などが知られている<sup>5)</sup>。

当時の多くの人々は、簡単な髭剃りなどは自分でやっていただろうが、散髪を引き受ける床屋もいた。神殿には神官のため、軍隊には兵士のための専属の床屋がいただけでなく、王や貴族のお抱えの床屋、一般の客を相手にする床屋もいたとみられ、いくつかの墓の壁画や浮彫には、彼らが働く姿が描かれている<sup>5) 9)</sup>。上流階級の人々は整髪をする使用人を抱えており、女主人が侍女に髪を結わせている場面が絵画や浮彫などにしばしば表されているほか、女主人であるネズミの髪を侍女として仕える猫が整えるという戯画も残されている<sup>2) 9)</sup>。このような場面では上流夫人は常に椅子に腰掛けて鏡を見ており、後ろに立つ召使がヘアピンを使いながら主人の髪を整えている。ここで整えられているのが女主人の本来の髪（地毛）なのか、それとも鬘なのかは明らかではないが、髪が短く表されている場合は地毛かもしれないが、長い場合はおそらく鬘と思われる。鬘は毛髪のトラブルを隠すためのものではなく、人前で身につけるファッションのひとつであり、それに対する日頃の身だしなみとして、本来の毛髪にも関心は払われていたであろう。整髪に使われたとみられる道具としては、ヘアピンや櫛のほか、細長い2つの部品をハサミのようにつなげた金属製品が知られている<sup>4) 5) 9)</sup>。先端が刃になっている部品と、それを収める溝が先端にあって柄は人間や動物の形をした部品からなるこの金属製品は一般にヘアカーラーではないかとみられているが、詳しい用途については議論が分かれており、まだ結論は出ていない。しかし、溝のある部品の柄には末端が小さな刃になっているものがあり、この金属製品がナイフあるいは剃刀の機能を兼ねていたことは確かと言える<sup>5)</sup>。

鬘<sup>4) 5) 9)</sup>は一部に植物繊維が使われるほかは、ほぼ人間の毛髪で作られており、巻き毛などをしっかり固定するため、蜜蝋や樹脂が塗られた。鬘や地毛のボリュームを増すためのヘアピースも作られており、鬘とともに墓の副葬品とされる場合があった。壁画や浮彫の人物表現や彫像をみると、鬘のスタイルには時代ごとの流行があったことがわかる<sup>9)</sup>。まず古王国時代の男性の鬘には、巻き毛あるいは髪房が層をなす短いタイプと、耳の後ろで広がるオールバックのタイプがあったが、この時期の貴族は鬘をつけず頭髪を短く刈った姿で表現されることもあった。同時期の女性の鬘は厚みのある長いものが一般

的で、なかには髪が肩より下に伸び、背中と両肩の前に下がるものもみられる。この3つの房に分かれた髪型は女性の古典的なスタイルとなり、後の新王国時代には人間の女性ではなくもっぱら女神の髪型となっている。

中王国時代には男性の鬘も以前より丈が長くなり、背中に垂れ下がるオールバックの鬘や、女性の髪型のように背中と両肩に分かれた鬘がみられるようになる。中流以上の男性が鬘をつけない姿で表わされるのは比較的稀である。女性の鬘は、古王国以来の3つの房に分かれたものが一般的だが、その発展形として、両肩から垂れる髪房の先端が巻き毛になった鬘が出現する。一般に「ハトホル鬘」と呼ばれるこの鬘は、はじめは女性王族の鬘だったが、やがて王族以外の貴婦人も用いるようになった<sup>9)</sup>。

新王国初期の鬘は、中王国時代のものとはあまり変わりはなく、オールバックの男性用鬘や房に分かれた女性の鬘などがしばしばみられるが、やがてこのような古い鬘は廃れ、新しい髪型の鬘が出現する。たとえば上流夫人の鬘は、巻き毛あるいは縮れ毛で耳を覆うほどボリュームのあるものとなり、ロータスの花輪飾りや髪房を束ねるバンドのような髪飾りが多くみられるようになった。一方、貴族の鬘として広く用いられるようになったのは、オールバックの髪の下に巻き毛や縮れ毛がのぞく二層構造の鬘である。第18王朝後期になると、男女双方が用いる短い鬘が新たに作られる。これはおそらく南方のヌビア人の髪型をもとにしたもので、巻き毛の列が層を成す特徴を持ち、首の左右に下がる「ヌビア鬘」と、うなじの上で丸くまとまる「丸鬘」の2種類があった。第19～20王朝時代には、この「ユニセックス」の鬘は廃れ、男女とも丈の長い鬘を用いるようになる。男性の鬘は、第18王朝後期の二層構造の鬘から、全体が巻き毛で房が垂れる鬘となり、女性の鬘も、背中と肩の前に長く垂れ下がる巻き毛の髪型が一般的となっている。

新王国時代の墓壁画や墓浮彫に表された宴会の場面をみると、貴族の男女や踊り子、楽師などの頭上に円錐形の物体がのっている。壁画では上半分が褐色、下半分が白色に塗られているこの物体は一般に「化粧コーン」と呼ばれており、獣脂あるいは蜜蝋に乳香や没薬などの樹脂で香りをつけた軟膏の塊とみられている<sup>2) 5) 9)</sup>。上半分の茶褐色はおそらく香りのエッセンスを色で示したもので、これを含む獣脂が溶けて流れ落ちることで、鬘とその下の毛髪に

芳香がうつるとともに、髪を守る保湿効果もあったのだろう。壁画では、「化粧コーン」を頭上にのせた人々の白い衣服が茶色く染まっている描写がされる場合があるが、これは芳香成分を含む獣脂が髪からさらに衣服へとしみ込んでいる様子を表したものかもしれない。これと同様の習慣はアラブの遊牧民にもあることが指摘されており、旧約聖書の詩編にも頭上から注がれる香油についての言及がある<sup>2) 4)</sup>。しかし壁画や浮彫にみられる「化粧コーン」の描写は、実際にそのようなものが頭上にのっていたことを示すのではなく、むしろ髪や地毛に擦り込まれた軟膏の量を目に見える形で示したものだだった可能性もある<sup>10)</sup>。

#### 4. 衣装

墓の浮彫や壁画などに描かれた古代エジプト人の衣服は、化粧や髪とともに、彼らのイメージを構成する要素のひとつと言える。しかしそのような衣服の図像表現は、前述のように、着る人の身分や役割を示す「記号」であって、必ずしも当時の人々が日常生活で身につけていた衣服をそのまま示しているわけではない。たとえば新王国時代の墓壁画には、流行の髪とゆったりした衣装を身につけた墓主やその家族が沼地で狩猟をし、あるいは来世の楽園「イアルの野」で農耕にいそしむ姿が描かれるが<sup>11)</sup>、彼らが生前、同じような衣装をいつも着て過ごし、その衣装のまま野外で活動していたとは考えにくい。描かれているのはあくまでも、墓主一家の地位や富を象徴する「晴れ着」なのである。幸いなことに、当時の人々が着用し、副葬品として墓に納めた衣服が遺物としてわずかながら残っているため、壁画や浮彫では得られない情報を多少とも入手することができ、時代による衣服の変遷、とくに貴族など上流階級の衣服の変化をある程度たどることも可能である。

古代エジプトで衣類の生地として主に用いられていたのはリンネル（亜麻布）であり、先王朝時代初期（前5000年頃）の遺跡からもリンネルの布の断片が発見されている<sup>5) 12)</sup>。インジゴやアカネ、ベニバナなどの染料とミョウバンを使う染色技法<sup>12)</sup>は古くから知られていたが、リンネルにはあまり用いられず、それを素材とした衣服は生地そのままの白くて無地のものが大部分を占めていたと思われ、墓壁画などに描かれた人々の衣装も多くは白色である。リンネルは、いつ収穫した亜麻を使うかによって質

の異なる生地となり、さまざまな用途に使うことができた<sup>12) 13)</sup>。若い緑の茎を使えば柔らかくて薄い生地、やや熟した黄色い茎からは丈夫な生地を織ることができ、熟した茎はロープや筵、舟の帆の材料になったのである。リンネルの色も亜麻の収穫時期によって、純白から明るい茶色までさまざまであった。

リンネル以外に利用された素材としてはまず羊毛が挙げられる<sup>12)</sup>。羊毛の衣服についてはわずかな断片が発見されている程度だが、ヒツジやヤギの飼育が盛んに行われ、昼夜の温度差が激しいエジプトでは、暖かな羊毛の衣類が古くから広く利用されていたことは疑いない。歴史家のヘロドトスも、羊毛はエジプトでは禁忌とされ、墓や神殿には持ち込みを許されなかったとする一方で、日常生活では羊毛の外套が使われていたと記している（『歴史』巻2・81）<sup>14)</sup>。このほか、動物の毛皮やなめし革が、葬祭神官のまとうヒョウの毛皮、新王国時代の兵士や水夫がつけた腰巻など特殊な衣類に使われていた<sup>12)</sup>。

古代エジプトの衣服、とくに絵画や浮彫などに描かれる衣装の一般的特徴としてまず言えるのは、手が込んでいるがかさばって動きにくい衣装は、管理者の立場にある（したがってあまり動く必要のない）人物の衣装だということである<sup>13)</sup>。こうした高級服は、時代とともにいっそう入念なものへと発展していった。上流階級の「晴れ着」はその典型と言えるだろう。その一方で、支配される側の庶民は（来世で亡き主人のため良く働けるように）それぞれの仕事にふさわしい服装で描かれている<sup>13)</sup>。たとえば屋外で働く農夫や漁夫などはキルトを腰に巻くか（下着である）三角形の腰布を身に着けるだけであり、貴族の宴席にはべる女楽師や踊り子は、腰回りにビーズの帯を巻いただけのエロチックな姿で表現されるのである。これらはもちろん仕事着であり、彼らは普段の生活では、上流階級の衣装と基本的には同じながら、もっと簡単で品質の劣る衣類を身に着けていたのだろう。

古王国以前の彫刻や浮彫などをみると、上流階級の男性は腰にキルトを巻いて布の端を結ぶか帯留めで固定し、上半身には片方の肩にかかる外套を着る場合がある<sup>5) 12) 13)</sup>。彼らのキルトにはしばしば髪がつけられており、三角形に張り出しているように表現されているものもあるが、これは糊を使って固めたものかもしれない。髪は、専門の洗濯夫が濡れた衣服を何度もたたんでつけたか、あるいは凹凸のある板に押し付けてから糊で固定してつけたと考えら



れている<sup>5) 13)</sup>。一方、同時期の女性の衣服として描かれているのは、ゆったりしたケープと、胸から向こうずねまでをぴったりと覆う肩紐つきの筒形ドレス（シースドレス）であるが、このドレスは前述の髪房に分かれた鬘とともに女性の古典的なスタイルとなり、後にはもっぱら女神の衣装とされた<sup>5) 12) 13)</sup>。

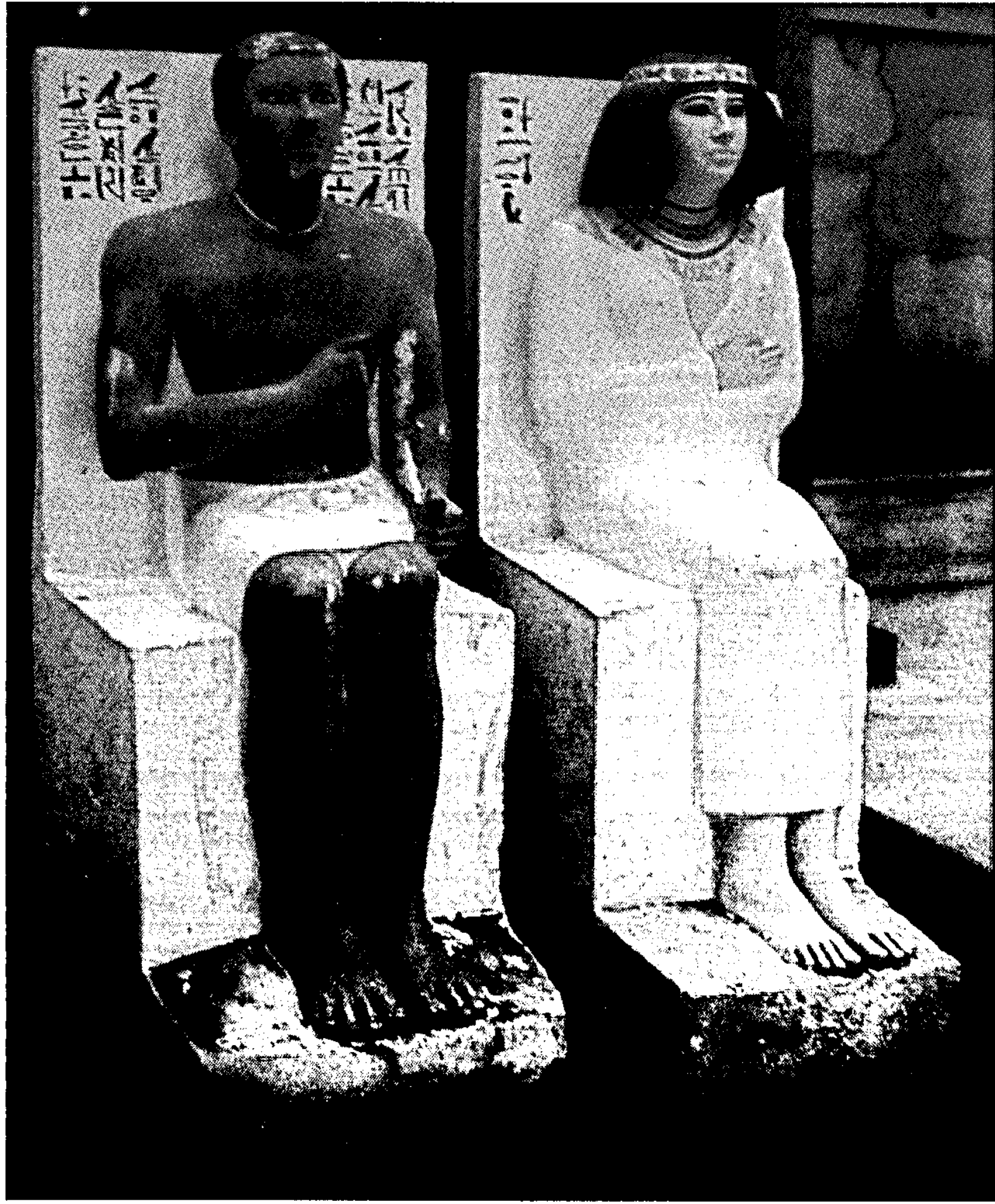


図3. 古王国時代の貴族夫婦像。夫はキルトを着用，妻はシースドレスの上にケープを羽織り，鬘をつけている。

遺物として現存する古代エジプトの衣服のうち最古の例は、第1王朝時代（前2800年頃）の墓から発見されたドレスである<sup>12) 15)</sup>。上部のみが残るこのドレスは細長い布を側面で縫い合わせたスカートに、襷のある当て布と長袖をつけたもので、袖がある点にくわえ、Vネックになった首周りや、幅があってゆったりとした点などシースドレスとは異なる特徴を持っている。古王国や中王国の墓からも、この服と似たドレスが数着発見されているが<sup>12) 15)</sup>、壁画などに描かれたシースドレスと同じ衣服は遺物としてはまだ発見されていない。図像に表されたシースドレスが、実際に発見されたドレスを様式化して表現したものなのか、それとも異なる種類のドレスなのかについてはまだ結論は出しておらず、長方形の布を身体に巻き付けて留めたドレスに、首にかけるサッシュ（飾り帯）を添えたものだったとする解釈も出されている<sup>15)</sup>。身体に巻き付けて着用するドレスは

中王国以降の墓壁画などにも描かれており、「シースドレス」が実はそうした衣服の一種だった可能性は否定できない。

中王国時代には男性の新しいファッションとして、従来の短いキルトの上に長くて透き通ったもう1着のキルトを着用する「重ね着」やウエストで固定する長いキルトなどにくわえ、バッグ・チュニック（筒形衣）が出現した<sup>5) 12) 13) 15)</sup>。壁画に描かれているだけでなく、墓の副葬品とされた実物も何着か現存するこのチュニックは、長方形の布を半分にたたみ、腕を通す穴を残して両側面を縫い合わせ、折り目の中央に首を通す穴を開けたもので、新王国時代には男性用の標準的な衣服となった。

新王国時代にはいると男性用の衣服はさらに洗練されたものとなり、バッグ・チュニックとキルトの



図4. 新王国時代の貴族夫婦像。夫は袖付きのバッグチュニックとキルトを着用，二層構造の鬘をつけており，妻は入念に作られたガウンと鬘をつけている。



上に、薄手のリンネルで作られた半透明のショールをはおる着こなしがみられるようになる<sup>5) 12) 13)</sup>。さらに新王国後期には、繁栄の時代を象徴するかのようになり、美しい髷のついた丈の長いバッグ・チュニクに、フリンジ（房飾り）のついたサッシュを組み合わせたゆったりした衣装が用いられるようになった<sup>5) 12)</sup>。古王国から中王国まであまり変化のなかった上流夫人の衣装も、新王国時代になると男性のそれにおとらず優雅なものとなり、袖無しのチュニクの上に、フリンジと髷のついた（少なくとも2×1mほどの）布を腰に巻いて肩にかけ、胸の下に回して結びあわせるガウンをつける着こなしなどがみられる<sup>5)</sup>。

どの時代の衣服も白くて無地のものが一般的だったため、とくに上流階級の人々は、男女とも金や宝石、ファイアンスで作られたネックレスやアームレット、アンクレット、新王国時代に流行した耳飾りなどさまざまな装身具を身につけて衣服に色彩をくわえるのを好んでいた<sup>13)</sup>。これらの装身具には、「生命」「繁栄」「健康」などを意味する縁起の良い文字やシンボルなどが意匠に組み込まれたものが多く、護符としての機能もあったとみられる<sup>16)</sup>。当時の装身具のなかでもとりわけ古代エジプトに特有のものと言えるのは、ファイアンスや宝石のビーズを何重にも重ねた幅広ネックレスであろう<sup>5) 13) 16)</sup>。このネックレスは花輪を模倣したもの、花卉や葉、果実をかたどったビーズを重ねたものなどがあり、左右対称に作られていて、ビーズの大きさは中心に近いものが最も大きく、左右に離れるにつれて徐々に小さくなるよう工夫されていた<sup>16)</sup>。このためネックレスの幅は中心部が最も太く、外側にいくほど先細りになり、身につけると奥行きが感じられるとともに中心部が強調されるが、そこには金の枠に宝石やガラスの象眼を施した胸飾り<sup>16)</sup>が下げられ、装飾効果が高められた。幅広ネックレスの両端には、ビーズの列を固定してネックレスの後ろの紐に接続するターミナル（エンド・ピース）が配され、紐の中央には重いネックレスと釣り合う平衡錘がつけられていた。

古代エジプト人はおそらく多くの時間を裸足で過ごしていたとみられるが、履物としてなめし革や葦で作ったサンダルが使われており、鉱山で働く労働者にも食料や油とともにサンダルが支給されていたことが知られている<sup>13)</sup>。第三中間期までには、アッパーのついたなめし革の靴も出現した<sup>17)</sup>。

## 5. おわりに

古代エジプトの貴族が自らの地位や富を誇る形容辞のなかには「衣の白い者」という表現が含まれており<sup>18)</sup>、秩序の崩壊と社会の混乱を描いた文学作品『イプウェルの訓戒』には「こんな時代には、衣の白い者などいない」という嘆きが記されている<sup>19)</sup>。古代エジプト人、とりわけ支配階級の人々にとっては、「装い」とは自らの地位を示すものであるとともに、社会の安定や繁栄をはかるバロメーターでもあったのだろう。それはまた、自らを美しく飾りたいという現代人にも共通する願いのあらわれでもあったのである。

\*本稿は、2010年度明倫短期大学公開講座（第3回、2010年11月20日）の講演内容に、加筆・修正を施したものである。

## 文 献

- 1) 内田杉彦：エジプト美術入門。明倫菌誌，4 (1)：76-81, 2001
- 2) Green, L. : Toiletries and Cosmetics. Redford, D.B. (ed.) : The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt, Vol.3. 412-417, Oxford University Press, New York, 2001
- 3) Lucas, A. : Ancient Egyptian Materials and Industries. 80-97, 327-337, Histories & Mysteries of Man Ltd., London, 1989
- 4) Hughes, G.R. : The Cosmetic Arts in Ancient Egypt. Journal of the Society of Cosmetic Chemists, 10 (3) : 159-176, May 1959
- 5) Bourriau, J. D. , E. Brovarski et al. : Egypt's Golden Age : The Art of Living in the New Kingdom 1558-1085 B.C. 170-254, Museum of Fine Arts, Boston, Boston, 1982
- 6) 内田杉彦：古代エジプト人と病気。明倫菌誌，3 (1) : 60-66, 2000
- 7) Nunn, J.F. : Ancient Egyptian Medicine. 197-199, British Museum Press, London, 1996
- 8) Lilyquist, C. : Ancient Egyptian Mirrors from the Earliest Times through the Middle Kingdom. Deutscher Kunstverlag München Berlin, München, 1979
- 9) Green, L. : Hairstyles. Redford, D.B. (ed.) : The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt, Vol.2.



- 73-76, Oxford University Press, New York, 2001
- 10) Manniche, L. : *Sacred Luxuries : Fragrance, Aromatherapy, and Cosmetics in Ancient Egypt*. 95-96, Cornell University Press, Ithaca, 1999
- 11) Hodel-Hoenes, S. : *Life and Death in Ancient Egypt : Scenes from Private Tombs in New Kingdom Thebes*. figs.15,182 and 183, Cornell University Press, Ithaca and London, 2000
- 12) Hall, R. : *Egyptian Textiles*. Shire Publications Ltd., Princes Risborough, 1986
- 13) Green, L. : *Clothing and Personal Adornment*. Redford, D.B. (ed.) : *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, Vol.1. 274-279, Oxford University Press, New York, 2001
- 14) Herodotus (translated by R. Waterfield) : *The Histories*. p.126, Oxford University Press, Oxford and New York, 1998
- 15) Vogelsang-Eastwood, G. : *Pharaonic Egyptian Clothing*. 88-168, E.J.Brill, Leiden, 1993
- 16) Markowitz, Y. J. : *Jewelry*. Redford, D.B. (ed.) : *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, Vol.2. 201-207, Oxford University Press, New York, 2001
- 17) 花坂 哲 : 皮革製サンダル考—エジプト・アコリス遺跡出土のサンダルを例として—。西アジア考古学, 6 : 87-101, 2005
- 18) Schenkel, W. : *Memphis · Herakleopolis · Theben : Die epigraphischen Zeugnisse der 7-11. Dynastie ägyptens*. 112 (Nr. 81, 4), Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1965
- 19) Enmarch, R. : *A World Upturned : Commentary on and Analysis of The Dialogue of Ipuwer and the Lord of All*. 77 (2.8), Oxford University Press, Oxford and New York, 2008